龍神町三番地

りゅうじんちょうさんばんち

りゅうじん

じゅう

船戸与一

Funado Yoichi

龍神町二番地

船戸与一

Funado Yoichi

徳間書店

龍神町龍神一三番地

著者　船戸与一

1999年12月31日　初版

発行者　徳間康快
発行所　株式会社 徳間書店　〒105-8055　東京都港区東新橋1丁目1番16号
電話　03-3573-0111(大代表) 振替　00140-0-44392
本文印刷　(株)清菱印刷
カバー印刷　近代美術(株)
製本所　大口製本印刷(株)

© Yoichi Funado 1999
Printed in Japan
定価は帯・カバーに表示してあります。
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
編集担当　国田昌子
販売担当　山田章治／益子 光

ISBN4-19-861111-4

自殺するやつは、自分自身について勝手につくり上げたイメージを追い求めているんですよ。自殺するのは、おのれの存在を確かめるためにほかならない。

――マルロー『王道』川村克巳訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目次

プロローグ……5
第一章　島の子守唄……26
第二章　死人の港……112
第三章　夜囁く鴉……172
第四章　白昼の騒乱……241
第五章　黄昏の逆光……309
第六章　騒乱の郷……355
エピローグ……462

装丁／多田和博
写真／氷室　徹

プロローグ

階段を降りて来るきゅっきゅっという靴音にゆっくりと瞼を拭った。感触はぬるりとしている。脂汗が滲み出ているのだ。もう何日も顔を洗っていない。不精髭も伸び放題だった。梅沢信介は一瞬、洋子が食事を運んで来たのかと思った、もうそんな時刻なのかと。しかし、出勤まえの洋子ならスニーカーを履いているはずなのだ。こんなきゅっきゅっという重い革靴の音を立てたりしない。ああ、もうそういうことにすら神経がまわらなくなっている。落ちぶれ果てるとは生活能力の問題だけじゃない、精神の緊張が失われることを意味するのだ。信介はテーブルのうえのスコッチ瓶を引き寄せて、ふたたびそれを喇叭飲みしはじめた。この地下の一室には窓がない。ドライエリアが設けられてないので、腕時計に眼をやらないかぎり、陽が落ちたのかどうかさえわからない。だが、時間なんてどうでもよかった。胃のなかでシングルモルトの温かさがじんわりと拡がっていく。靴音が戸口の向こうで立ち停まった。信介がいまここで暮していることは洋子以外は知らない。だれなのだろうか？　いや、だれだろうがいい。信介はスコッチを飲みつづけた。戸口の扉が叩かれはじめた。

摑んでいる頭髪。恐怖一色の眼差し。口のなかに突っ込んだ拳銃。失禁によるアンモニアの臭い。おまえは人間じゃねえ！　生きてる資格はねえ！　ぷすぷすと泡立つ脳膜。勝手に動いた右の人差し指。炸裂音。飛び散った血液と脳漿。

戸口の扉はなおも叩かれつづけた。信介ははいってくれとも言わなかった。ノックが熄んだ。把手がゆっくりとまわった。蝶番がかすかに軋んだ。扉が押し開けられた。男がひとりはいって来た。小太りで額の髪がかなり後退している。黄色と焦茶の格子縞のブレザーを着ていた。ズボンは濃紺で、ネクタイは赤地に緑の水玉模様だった。信介はスコッチ瓶をテーブルに置いて、じっとそいつを眺めた。いまどき東京でこういう恰好をしている男はまず見ない。しかし、全体としては朧だった。やはり酔い過ぎているのだ。そいつが笑った。金歯が見えた。陽灼けしている。年齢がどれぐらいなのかはっきりしない。そいつがまっすぐこっちに近づいて来た。安っぽい整髪料の匂いが鼻腔をくすぐった。五年まえならメーカー名まで言い当てられただろう。しかし、いまは一切が曖昧模糊としていて、何よりもまずすべてに興味が持てない。気力だけじゃなく、体力にもまるっきり自信がなかった。そいつがテーブルのまえで足を停めた。頬にはさっきから愛想のいい笑みが滲みでている。その口が開いた。

「久しぶりだね、信ちゃん、憶えてるだろ、おれのこと？」

「だれだ、あんた？」

「憶えてないのかい、ま、だいぶ経ったからな。頭も薄くなったし。ほら、おれだよ、富次。

新谷富次。こう言やあ、憶いだしてくれたろ？」
「新谷富次？」
「そうだよ、あんたと大宮第四高校で机を並べてたあの新谷富次だよ。あんたほど目立った生徒じゃなかったけど、ときどきつまらねえことで言い争いをしたろう？」
信介はもう一度左手で瞼を拭った。二十四年まえの記憶がじんわりと脳裏に甦って来る。そうだ、机を並べたことがあったかどうかまでははっきりしないが、確かに同じクラスに新谷富次という生徒がいた。ほとんど言葉を交わしたことがなかったように思う。あまりいい印象は抱いていない。理屈好きで小狡いという評判だった。池島洋子との噂も取り沙汰されていた。信介は琥珀の液を喉に流し込んで言った。
「憶いだしたよ。確か、あんた、詩か何か書いてたな」
「そうだよ、あの新谷だよ。ラグビー部で右のウイングとしてばりばりだったあんたとちがって、軟弱で軟弱でしょうがなかったあの新谷富次だよ」
「で、何しにここに？」
富次はすぐにはこれに答えようとしなかった。部屋のなかを眺めまわした。埃の溜った模造大理石の床。磨かれてないカウンター。ベッド替わりに使っているソファ。そのうえに載っかっている二枚の毛布。ここは新宿三丁目の雑居ビルの地下の一室で、半年まえまではバーとして営業していた。経営者は洋子だった。ビルの右も左も四十坪弱の空地で、バブル期の地上げの結果、ここの一画は虫食い状態となっている。オーナーは老朽化した地上六階建てのこのペ

ンシルビルを解体して左右の空地を買い取り、新しいソシアルビルを作りたい意向らしいが、両方の空地が多重債権の担保となって動きが取れない状態だという。洋子はこの地下のバー経営に失敗し、いま歌舞伎町のスナックのママとして傭われている。ここの営業権を譲渡したいのだが、だれも買手が現われず、オーナーも新ビル建設の目途が立たないので、結局テナント料だけを支払いつづけているのだ。富次がすこし声を落として言った。

「ここにどれぐらい？」

「二ヵ月ちょっと」

「体が心配だよ。もう四十二歳なんだし、太陽もはいって来ないこんなところで暮しつづけるのは……」

「ここしかねえんだよ、他に塒は……」

「新聞と週刊誌で読んでたよ、信ちゃん」

信介はスコッチ瓶の口をふたたび唇に近づけた。高校時代に一度だって富次に信ちゃんと呼ばれた記憶はない。どうしてこんなふうに慣れ慣れしい口ぶりをするのか見当もつかなかった。

「大変だったな、同情するよ」

いったい、どういうつもりなんだ、きみは！　信じられんよ、まったく。きみはだれしもが認める優秀な刑事だった。わたしはきみを本庁勤務に推薦するつもりだったんだぞ。もちろん、きみの憤りがわからんというわけじゃない。やつは十四歳の少女を誘拐して強

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

姦し、殺したうえで両親に身代金を要求したんだからな。だが、きみがやつを取り押さえたとき、やつは銃器もナイフも持ってなかった。それなのに、きみはやつの口のなかに銃口を突っ込んでぶっ放した。正当防衛どころか過剰防衛にも当たらない。マスコミがいまどう騒いでるか知ってるか？　法律を遵守すべき警察官が無抵抗になった人間を殺したんだぞ。そりゃあな、いまの裁判じゃあんな酷いことをやったやつだって死刑は免れるだろう。けど、かと言ってきみが殺していいというわけじゃない。いつも冷静沈着な行動を採って来たきみがいったいどうしたんだ？　残念だよ。わたしは残念でたまらない。これできみの公務員としての将来は完全に消えた。刑期を終えたら、わたしのところに訪ねて来るがいい。警察官僚の天下り先の警備保障会社ぐらい紹介してやれると思う。とにかく、残念だよ。わたしは上司としてきみの能力をだれよりも高く評価してたんだからね。

富次は胸の内ポケットからシガレットケースを取りだした。鰐革張りだ。いまどき組関係の連中だってこんなものは使わない。こいつの商売は何なんだ？　信介は酔いのまわった眼でそれをぼんやりと眺めつづけた。漆塗りの小ぶりな黒いライターが取りだされた。富次がそれで銜えていた煙草に火を点けた。

「なあ、あんた」信介はそう声をかけた。新谷さんと言う気もなかったし、富次と呼び棄てにもできなかったからだ。いずれにせよ、むかしもいまもこの男に親しみは感じられない。「どうして知った、おれがここにいることを？」

「聞いたんだよ、洋子さんに」
「つきあいはつづいてたのか？」
「え？」
「洋子とあんただよ。高校時代に噂があった、ふたりはできてるとな」
「大学の三年までつきあった。けど、それからは電話と手紙だけだよ」そう言って富次は紫煙を大きく吸い込み、ふうっとそれを吐きだしてつづけた。「どうなんだ、信ちゃん、あんたのほうは？」
「何が？」
「洋子とだよ」富次ははじめてむかしの女を呼び棄てにした。「一応、面倒看てもらってるんだし……」
「肉体関係は何もねえ、恋愛感情も。ただ洋子が勝手に恩義を感じてる。むかし、この店を食い物にしようとしてたやくざをおれが追い払ったことがあるんでな、埒のないおれをここに住まわせてる」
富次はじっとこっちを眺めつづけている。
信介は視線を合わせる気にもならなかった。こいつがなぜ洋子と別れたのかもべつに確かめたくはない。どうだっていいことだ。記憶が定かじゃないが、高校時代、ラグビー部のだれかが洋子の噂をしていたことがある。そいつはたぶん洋子に惚れていたのだろう。そのときの話では、洋子の父親は早く死んだが、母親は再婚したわけじゃない。かと言って、女手ひとつで

育てられたわけでもなかった。後見人めいた男に経済的な援助を受けたらしい。その男と洋子の母親がどんな関係にあったかは知る由もなかったが、何でもその男はカトリック教徒で、おそらくそれが理由だろう、洋子も母親もキリスト教に入信していたと言う。しかし、偏見だということは百も承知だが、洋子の性格はカトリック教徒らしからない。いや、こういうふうに決めつけるのはわれながらおかしいと思う。洋子のことが何となくわかりはじめたのは出所してからなのだ。水商売にはいるまえの洋子がどんな性格だったのかはまるでぴんと来ない。派手派手しい笑い。男まさりな言動。気っぷよさ。これが高校時代からのものなのか、それとも長年の水商売によって培われたものなのかは判断できない。しかし、それがどうだろうと、べつにどうでもよかった。信介は二度ほど生欠伸をした。

「憶えてるかい、信ちゃん」

「何を?」

「洋子はおれとつきあうまえに信ちゃんにラブレターを出した。高校一年の三学期だと思うけど……」

「だれがそんなことを言った?」

「洋子だよ」

「憶えちゃいねえ、そんなこと……」

「だろうね、だろうな。信ちゃんはそのころからもうラグビー部のスターだったから。女の子から騒がれっ放しだったしな。ラブレターのひとつやふたつ、いちいち憶えてたら身が保たな

いやね」
「なあ、あんた」
「何だい？」
「いったい何が言いたいんだね？」
「あるかい、灰皿？」
「カウンターの隅だ」
富次がそこに近づきバー・ハロウィンというロゴマークのはいった陶器の灰皿を手にしてテーブルの向こうに戻った。そこに煙草の灰を落としながら言った。
「結婚はしてたんだろう、信ちゃん、立ち入った話かも知れないけど……」
「別れた。あんなふうになったんでな」
「子供は？」
「いねえ。救いと言えば、それが救いだ」

判決――懲役五年六月。〈判旨〉被告人・梅沢信介は犯行当時現職の警察官であり、警察官職務執行法を厳守すべき立場にありながら、被害者・宮本和行を殺害した罪はきわめて大きいと言わなければならない。被害者はすでに無抵抗であり、刑法第三六条もしくは三七条に該当する状態では断じてなかった。確かに被害者の行なった犯罪は冷酷無比で一般感情からして赦せるものではないが、警察官としての本分を忘れて激情に走り、司法手

続を経ずして死に至らしめた被告人の行動に酌量の余地はない。

信介はブルゾンの内ポケットから煙草とライターを取りだして火を点けた。獄中での五年半の禁煙生活のせいかまだ紫煙の吸いかたがむかしに戻ってない。噎せた。いがらっぽさが喉を刺戟する。煙草に噎せながら信介は富次に言った。

「で、何の用なんだね、前科者のこのおれに？　人殺し刑事だの殺人警官だのとマスコミで騒がれた男が出所後どれほど落ちぶれてるか確かめに来たのかね？」

「信ちゃん」

「何だ？」

「変わったな」

「あたりまえだ、五年半も臭い飯を食えば刑事だろうと何だろうと変わる」

「高校時代の信ちゃんはそんな萎けた物言いはしなかった」

「だから、どうだって言うんだよ？」信介は思わず声を荒らげた。大声をあげてから後悔した。こんなことでかりかりするなんてむかしは考えられもしない。こころが荒んでる証拠だ。しかし、こういう反応はじぶんでも止められそうになかった。「どうせもう萎けて生きるしかねえんだ、悪いか？」

「おれはね、信ちゃんが人殺しとは思っちゃいない。憶いかえしてみろよ、確かにマスコミは人殺し刑事だの殺人嗜好症の警官だのと書き立てた。けど、新聞や週刊誌の記事はよく読むと

あの事件を好意的に扱ってる。当然だよ。宮本ってやつは十四歳の少女を誘拐して強姦し、首を絞めて殺したあと両親に身代金を要求したんだ。人間じゃない。法律的にどうだろうと、あんなやつは裁判なんかにかける必要はないよ。おれが信ちゃんだってぶち殺してる」
「用件を言え。まどろっこしいのは嫌いだ」
「どうするつもりだい、これから？」
「何を？」
「暮しだよ」
「まだ何も考えてねえ。おれの上司だった警部が警備保障会社に就職を斡旋すると言ってくれてるが、そこに行く気もねえし……」
「当分は酒に溺れて生きるのか？」
「そいつもおもしろいと思ってる」
「生き疲れるぞ」
「なあ、あんた」
「何だい？」
「説教をしに来たのか？」
富次が頬を緩めた。笑ったのだ。信介にはなぜ笑うのかわからなかった。酒で視覚がおかしくなってることも確かだ、もしかしたら見まちがいかも知れない。富次が灰皿を手にしたままテーブルのすぐまえまで歩み寄って来た。一瞬、こっちの銜えている煙草の灰を気にしたのか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com